

常に「いま」に向けられた思想的問い

一九六〇年代からの前衛演劇運動を主導し、二十一世紀の現在も疾走することをやめない永遠の先駆者、唐十郎

富岡幸一郎

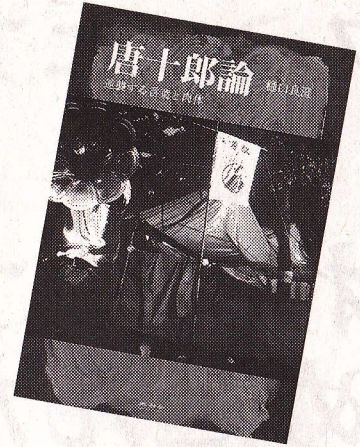
樋口良澄 著

▶ 唐十郎論

逆襲する言葉と肉体

1・6刊 四六判218頁 本体2000円

未知谷



樋口良澄は、この唐十郎という「状況」を「総体としての表現者」として描き出す。一九六四年に二十四歳で最初の戯曲を書いて以来、五十余年、二〇一二年の唐組新作公演『西陽荘』まで約百本の戯曲を著し、現在も活火山のように激震を繰り返す唐のその表現を「言葉と肉体」から捉える。

唐十郎とは何者か。一九六〇年代からの前衛演劇運動を主導し、二十一世紀の現在も疾走することをやめない永遠の先駆者。状況劇場の名の通り、常に状況と相渉るなかで表現の格闘を繰り返してきた存在。演出家、俳優、映像作家、劇団主宰者、小説家……。しかし、唐十郎の表現者の本質とその全体性に迫った批評は、実は少ないのではない。

《……唐組が結成され、特に二世紀に入ってから論者はまだ十分ではない。が、このきわめて稀で、傑出した表現者のあり方は、現在の文学、演劇のみならず、あらゆる芸術表現に深い示唆を与えらると思ふ。二世紀の高度情報化社会の中でその重要性はますます大きくなってきている》(はじめに)

唐十郎の六〇年、七〇年代を同時代として体験しその熱狂を共有した世代は、誤解をおそれずにいえば唐という存在をひとつの「神話」と化すことで、歴史の檻のなかにその「表現」を固定化する傾向がある。それは演劇が役者、肉体を通して表現されることから、肉体という自然過程を無意識のうちに前提とする「観客」と軌を一にするといつてもよい。しかし唐の演劇とは、演じる者と観る者との境界を打ち破り、主体と客体、自己と他者という距離を破壊し、そこに忽然と現れる日常性をこえた「状況」を演出することではなかったか。

・浅草や隅田川の水がはるかに映し出されている。唐の演劇的闘争を政治の次元におさめることはむろんでないが、二十一世紀に入ってから唐の活動を詳細に追ってき著者は、「六〇年代末」という政治的枠組みにとられがちな視点を完全に乗り越えている。さらに、八〇年代の高度消費社会のなかで唐がその演劇活動において時代の空気をいかに対峙したかが述べられているが、文化のパッケージ化と市場原理とのなかで「痛みや病みを持つ、つまり死をかかえた肉体の表現」がそこで一貫して演じられたという指摘は重要である。なぜなら、それはバブル崩壊後の現在にまでつながる状況との根本的な対決の姿勢であるからだ。

八〇年代後半の唐の芝居には、アニメやゲームといったジャンルが取り込まれてくるが、その目論見はバーチャルな世界に対する生身の肉体からの鋭い問い掛けであった。安藤忠雄の設計による下町唐座の巨大な仮設劇場の時代を経て、再び紅テントによって、若い劇団員との新たな表現の模索を始めた九〇年代初頭、そして劇団員の成長とともに「唐組」という表現の場において、何がその闘争の対象となったのか。著者は本書の後半において、今日まで至るこの唐の表現の軌跡を具体的な演劇作品を通して描いている。情報化社会の内側に入り込み、それを食い破ろうとする唐の戦略。そしてクローバルな世界のなかで排除され、消されていく小さな「もの」への固着。それは単に具体的「もの」の持つ力だけではなく、そこに宿る時間と超越性を演劇空間のなかに立ち上げさせてみせるのである。

三月十一日の東日本大震災とそれ以後の唐組の芝居について、著者は最後に言及している。地震と津波、そして原発事故による故郷の喪失。この災厄がわれわれに示したものは、唐がその出発点から日常性を切り裂く風景として現前化させてきた、廃墟と瓦礫の現在である。三・一一以降紅テントの思想的意味は大きく変わったと著者は指摘する。すなわち、都市のなかの「異物」であった紅テントは、都市が都市でありえない巨大な災害の可能性のなかで、新たな「廃墟の想像力」を示し始めたからである。唐が示してきた「架空の焼野原」は、いまや全くの架空ではない。巨大地震により大都市がそうなることもありえる。そこでは誰もが「難民」になるかもしれない。テントの設置に著者も立ち会っているが、トラックから降ろされた機材や衣装箱、木材や金具が広げられたのを見たとき、それは東北の被災地の風景にも重なり、そして瓦礫から想像力を立ち上げ、その現実をこえていく唐十郎の劇的空間がこれ以上ない強烈なインパクトを持ってわれわれに迫ってくる。

本書のサブタイトルに「逆襲する」という文字が記されているが、この最終章を讀したとき、その言葉の突き刺さるような意味がよく分かる。それは唐十郎という存在が、その総体として表現してきたものは、常に「いま」に向けられた思想的問いであるということだ。唐十郎の全表現は、時代とともに燃え尽きた神話ではなく、いまここに立っている我々を旋風のように襲い、いまという時代を襲撃する。紅テントの設置から芝居小屋を離れた唐の横顔まで、著者の樋口良澄は、常に冷静な観察者としてありつつ、また熱烈な共鳴者としてそこにいる。それは批評の最も大切なあり方であり、本書はこの誠実な批評家の精神にあふれている。

(文芸評論家)